浜中町立茶内小学校「学校だより」

THE　茶内小　TIMES

令和４年（2022年）７月11日発行　VOL 15

AI vs. 教科書が読めない子どもたち

浜中町立茶内小学校長　冨　田　直　樹

全国の２万５千人が参加した基礎的読解力の調査におけるリーディングスキルテストの問題分野別正答率を、新井氏は次のように示しています。

学年	係り受け	照　応	同義文判定	推　論	イメージ同定	具体例同定（辞書）	具体例同定（数学）
小６	６５．１	５８．２	６２．１	５８．６	３０．９	３２．５	１９．６
中１	６５．７	６２．３	６１．６	５７．３	３１．０	３１．０	２４．７
中２	６７．８	６５．２	６３．９	５８．９	３２．３	３１．７	２７．４
中３	７３．３	７４．６	７０．６	６４．６	３８．８	４２．２	３４．２
高１	８０．７	８２．６	８０．９	６７．５	５５．３	４６．９	４５．７
高２	８１．５	８２．２	８１．０	６８．５	５３．９	４３．９	４２．４

「係り受け」と「照応」は、ＡＩが得意としている表層的な読みを問う問題です。この２つは、本調査の受検者もそこそこできています。しかし、それで喜んではいられません。ＡＩ並ということは、ＡＩに代替されるということです。重要なのは、本たよりの13号で新井氏の言葉を借りて示しましたが、ＡＩにはまだ難しい他の４つの分野である「同義文判定」、「推論」、「イメージ同定」、「具体例同定」がどの程度できるか、ということです。ＡＩと差別化して2030年を生き延びるには、できればこの辺りの正答率は７割ほしいところです。しかし、そのレベルに達しているのは、「同義文判定」だけです。「イメージ同定」と「具体例同定」の正答率の低さは、かなり深刻です。

新井氏は、「基礎読解力を左右するものは何か」を突き止めるために、生活習慣や学習習慣、読書習慣など、かなり網羅的に研究を進めましたが、「これだ」と言えるような因子を発見することはできませんでした。そんな中で、埼玉県戸田市の実践が一つの光明となりうる可能性があります。

戸田市は、2016年度から小学校第６学年から中学校第３学年まで児童生徒の全員が基礎的読解力の調査を受けています。さらに、市内の全ての教員も本調査を受け、調査問題を分析することで、子どもたちの読解力の向上を図る対策を検討しています。そして、全ての教科において「教科書を読む」ことの大切さと、それに「国語」という教科がいかに深くかかわりをもっているか自覚し、「指導事項」を踏まえた国語の授業改善を推進するとともに、国語で培った力を他教科等の学びに生かしています。

この戸田市の取組は、客観的なデータに基づいて、私たち教職員が「きちんと教科書が読めるためにはどうしたらよいか（未来社会の創り手になるためにはどうしたらよいか）」を研究し、実践する、そういう地味でベーシックなことが、いかに重要であるかということを示唆していると考えます。そして、このことが、ＡＩが今ある仕事の半分を代替する時代を生き抜く力を子どもたちに育むことにつながるのではないでしょうか。